徳富蘆花健次郎と金尾文淵堂

石塚純一

はじめに

昭和二年九月一八日、徳富蘆花健次郎は死の床で兄蘇峰と一五年ぶりの和解対面を果たし、同夜遅くに永眠。数え年の六〇歳であった。蘆花の一周忌を記念して『蘆花全集』が企画され、その第一巻の刊行が待たれる昭和三年八月、創刊されたばかりの雑誌『サラリーマン』一巻二号にこんな記事が出た。

新潮社が今度蘆花全集を出すにつき福永書店の持つている版権を五万円で譲り受けた。蘆花全集の出版について一芝居があつた。徳富さんの生前から執拗につきまとつたものに金尾文淵堂と云ふのがある。徳富さんを

馬関まで追つかけて行つて、「日本から日本へ」をもらつて出版したと云ふ曰く付の代物。

それが、新潮社の蘆花全集出版を聞いてあきらめきれず、徳富未亡人の所へ日参して、全集を自分の方にくれるやうに頼んだ。新潮社の手に渡つたものだから仕方がないといつても、いつかな聞き入れず、終いには此処の門で首を釣るぞと嚇して未亡人を震い上がらせた。

『サラリーマン』という雑誌は昭和に入って、大都市への人口集中がはじまり大衆化社会が出現する中で生まれた、今で言うビジネスマン向けの経済雑誌であった。[*1] 創刊当初は出版界の裏情報を集めた業界ゴシップ誌的な性格が強く、この記事も不正確（馬関ではない）で書きぶりに悪意が感じられる。実際に店主金尾種次郎が愛子未亡人を嚇したとは考えられないが、金尾文淵堂が蘆花全集の刊行を自ら担いたかったであろうことは思いはかられる。なぜならば徳富蘆花という特異な個性と深く付き合った出版者・編集者は、この時に福永書店の福永一良（蘆花の没後、『全集』刊行直後の昭和三年一二月に死去）のほかには金尾種次郎以外にないからである。しかし、『蘆花全集』全二〇巻は、結局昭和三年一〇月から蘆花全集刊行会（沖野岩三郎が中心、福永書店も加わっていた）編、新潮社発行で刊行が開始された。

金尾文淵堂はどうして『蘆花全集』に、首をくくると言うほどこだわったのだろうか。著者と編集者との関わりから本は生まれる。出版者の著者に対する思い入れは大きい。だが、たとえ誇張された表現だとしても「首をくくる」と言うほどの執着には驚きを禁じえない。たった一冊、蘆花の本が文淵堂で作られただけなのに…、生前の蘆花と金尾はどのような関係にあったのかが気にかかる。その一回限りの現場を辿りながら、金尾文淵堂のこだわり

の理由を探ってみたい。

蘆花との出会い

出会いは全集刊行の二五年余り前に遡る。徳富蘆花（一八六八～一九二七）は明治元年の生まれだから、金尾種次郎（一八七九～一九四六）よりも一一歳年上であり、大阪心斎橋の老舗書店だった金尾文淵堂が文芸出版を開始した明治三二年ころ、蘆花は『不如帰』を書いて急速にその名が知られていく。金尾が東京の文芸雑誌に対抗して『小天地』という雑誌を発行し、蘆花に原稿を依頼したのは明治三四年のことだった。[*2] 大阪から東京原宿の蘆花の家まで訪ね、雑誌寄稿の約束をとりつけた。これが蘆花と金尾の初めての出会いであり、その時からいつか著書を刊行したいと願っていたに違いない。が、金尾文淵堂から蘆花の『日本から日本へ』全二部が刊行されたのは二〇年後のことで、この一点きりであった。この二〇年は蘆花にとっても、金尾文淵堂にとっても紆余曲折の長い道のりだった。金尾は蘆花を訪ね、時に拒絶されながら交流は徐々に深まっていった。

明治三六年、大阪で盛大に開かれた第五回内国勧業博覧会の見物をかねて、徳富蘆花は、金尾文淵堂を訪ねた。晩年の自伝小説『富士』はその様子を次のように記す。文中の熊次が蘆花、K君が金尾種次郎、S君は薄田泣菫である。

あくる日は心斎橋の狭い通りに書店B堂を訪ねた。主人K君を熊次は識つて居た。一昨年の秋上京のついでに原宿〔蘆花の住居〕に来訪した。色の白い、物柔らかな、大阪弁丸出しの、笑ふと赤い齦（はぐき）と味噌つ

歯を見せる若人であつた。（中略）父の時代からの仏教書肆、K君自身俳句和歌をやり、関西の文士芸術家と交遊も広いところから、追々文芸物の出版をしたり、小天地といふ雑誌を出したりして居た。小説黒潮が出ると間もなく、熊次はK君の電報を受取つた。

「ミタ、ウリタイ、三〇〇オクレ」

佳い電文である。

同年に蘆花が自費出版した『黒潮』を大阪の文淵堂に送ったが、その代金をよこさないので、その取立ての目的もあって大阪に出向いたのである。

心斎橋通りの小さな角店、立看板の陰には雑多な書を列べて、主人のK君は居なかつた。S君は居るさうで、二階に導かれた。倉づくりの薄暗い二階に、白い清げな面をした小柄の詩人S君と熊次は初対面の挨拶をした。

金尾種次郎は不在だったが詩人の薄田泣菫がいて、その二階で話をした。蘆花は「初対面」というが、泣菫も金尾と同じく前年に蘆花と会ったのである。[*3] 泣菫は文淵堂発行の文芸雑誌『小天地』の編集長をつとめていた。金尾との親しい関係は拙論を参照[*4]されたい。蘆花と泣菫とは今どんな本を読んでいるか、島崎藤村をどう思うかなどの話をするが、三日たっても金尾文淵堂は姿を見せず、蘆花は腹を立てる。ようやく忸怩とした顔の金尾が現れた。小説では「三日奔走したが、到頭金の調達が出来なかった、詫ぶるのである。さうか、出来ぬとならば、それまでで

ある。何故最初から顔も出さず、事を曖昧にするのか？さう叱って、熊次はK君を釈(ゆる)をした」とある。これは事実であろう。出版者としてはいかにも面目ない。雑誌『小天地』の発行に資産を注ぎ込み、博覧会をあてこんで編集に力を入れた『大阪名勝図会』もうまくいかずに経営が苦しかったとはいえ、自分がほれた作家の信用を失ったことは確かだ。この時、蘆花は三六歳、金尾種次郎二四歳である。

しかし、蘆花はこんな金尾をその後も見放さなかった。金尾文淵堂も明治三八年には東京へ移転し、懇意の内田魯庵に蘆花の原稿を取るにはどうしたらいいか相談する。魯庵は「毎月ちゃんと日を決めて、たとえ雨が降っても風が吹いても必ずその作家を訪問するのだ」とアドバイスし、金尾はその通りに実行したという。[*5]

金尾は蘆花の何に惹かれたのか。幾つかの理由が考えられるが、この時の金尾の関心はやはり『不如帰』だったと思われる。『不如帰』は国民新聞に三一年一一月から翌年五月まで連載されたが、新聞連載中はそれほどの反響はなく、売れ出したのは三三年一月に単行本化された後だった。初版二千部が毎月重版を重ね大ベストセラーになったことはよく知られている。[*6] 封建的家族制度の犠牲となった浪子と武男の別れ、哀しい夫婦愛の物語、『不如帰』は当時流行していた悲劇的な家庭小説のひとつで、金尾文淵堂では大阪毎日新聞などに連載され評判となった菊池幽芳や柳川春葉の家庭小説を単行本として出版することを一つの路線としていた。[*7] その路線上からも『不如帰』のような新作を期待し、ベストセラーを出したいと願ったに違いない。

しかし『不如帰』の作家は、もう二度とこのような小説は書かず、他の原稿をもらうことも一筋縄ではいかなかった。

苦悩する作家

蘆花の著書と出版者

ここで徳富蘆花の作家としての歩みを著作に即して辿り、その屈折した性格の一端を垣間見ることにしよう。

蘆花は、大阪を訪れた明治三六年に『黒潮』を刊行するが、これは『不如帰』の成功を背景に、兄徳富蘇峰との決別を企図した出版だった。それまで民友社に寄生するように生きてきた蘆花が兄と離れ経済的にも自立し、自ら黒潮社という出版社を立ててまったく独自に本を出版し、販売するという人生の画期的な事件だった。蘆花の著作は、明治三四年五月刊の『思出の記』以前はすべて兄の経営する民友社刊であり、その後は新しい出版者をその都度選んでいる。ここで蘆花の著書（単行本）と発行出版社を一覧しておきたい。

明治三〇年　『トルストイ』（十二文豪叢書の内）民友社
明治三一年　『青山白雲』　民友社
明治三三年　『不如帰』　民友社
同年　『自然と人生』　民友社
明治三四年　『思出の記』　民友社
同年　『ゴルドン将軍伝』　警醒社
明治三六年　『黒潮』第一篇　黒潮社

明治三九年　『順礼紀行』　警醒社
明治四二年　『小説　寄生木』　警醒社（小笠原善平の稿を元に補訂）
大正二年　『みみずのたはこと』　新橋堂・服部書店・警醒社
大正三年　『黒い眼と茶色の眼』　新橋堂
大正六年　『死の蔭に』　大江書房
大正七年　『新春』　福永書店
大正一〇年　『日本から日本へ』　金尾文淵堂
大正一二年　『竹崎順子』　福永書店
大正一四年　『富士』第一巻～四巻（昭和三）　福永書店

蘆花は比較的寡作だった。民友社を離れ人気作家になってからとくに、諸雑誌の依頼に応じて書くことが少なかった。『不如帰』でベストセラー作家になるまでは、兄が経営する民友社の窓際社員として、人と交際することもなく、悶々としながら「国民新聞」に翻訳記事やエッセイを書いていた（評伝『トルストイ』や『ゴルドン将軍』はその時期の仕事である）。しかしそれらへの反響は少なく、わずかに国木田独歩が『青山白雲』の一章をほめた以外にほとんどなかった。しかし、『不如帰』が出ると、その後に続いた『自然と人生』もよく売れ、この二冊で文名が高まった。「黒潮」は当初「国民新聞」に連載されたが、民友社刊とはならず、自費出版の形で出した明治三五年の単行本『黒潮』の巻頭には兄への「告別の辞」が載り、それが大きな反響を呼ぶ。しかし、これ以後の執筆活動は不

振を極め三七、三八年はまったくの不作。日露開戦に対しては反戦論にも組せず、かといって積極的支持もできずに悩みが深まる。常に兄のスタンスを気にしながら対抗しようとする。

三八年、九州旅行のあと、妻と二人で富士登山の途中、折からの暴風雨に会い数日間人事不省に陥り半死半生の眼に会う、これを神による警鐘と受け止め「精神革命」を唱え始める。このころ石川三四郎や木下尚江ら平民社の人々と親しくなり、キリスト教社会主義雑誌『新紀元』に「黒潮」第二編を連載しかけたが、これも間もなく中止撤回した。三九年、突然聖地巡礼とトルストイ訪問を思い立ち、単身約四ヵ月の旅に出る。それが『順礼紀行』となる。そして帰国後の翌四〇年二月、府下北多摩郡千歳村粕谷（現在の芦花公園恒春園）に転居し、いわゆる「美的百姓」をはじめた。蘆花四〇歳である。

明治四〇年から大正二年までの蘆花と金尾

その頃、東京へ進出した金尾文淵堂は、どのように蘆花との接触をはかっていたのか、明治三九年に蘆花が一回目の聖地順礼旅行に出かける際に、見送りのために神戸から門司まで同船し、原稿を懇請したという事実[*8]以外に、両者を結ぶ直接的な記録が見つからない。蘆花は詳細な日記をつけ続けたが、感情が激するとそれらをことごとく焼いてしまった。今残るのは大正三年五月五日から没年の昭和二年一月までの日記であるが、公刊されているのは大正七年末までである。[*9]

したがって大正三年までの交流ははっきりとしないが、いくつかの形跡が残されている。一つは、平民社関係の人々との接触を通じて出会っていた可能性が高いことである。金尾文淵堂ではこの頃木下尚江や堺利彦の本を次々

と刊行し、蘆花も木下や石川三四郎と親しくなる。また金尾文淵堂で出した『病間録』（明治三八）の著者、綱島梁川（明治三九年死去）を蘆花が訪ねていることなどである。第二点は、ほとんど雑誌に寄稿していない蘆花が、三九年一月に金尾文淵堂が発行元になって再興された『早稲田文学』一月号に「余が犯せし殺人罪」という短文を寄せたことである。[*10] わずか八〇〇字の短文とはいえ、『早稲田文学』だけにどうして蘆花が書いたのか。

新帰朝の島村抱月に『早稲田文学』の発行元になることを頼み込んだ金尾文淵堂は、編集に口を出さず金だけは出すという条件で刊行を始めたのだが、復刊第一号の筆者を見ると、抱月や逍遥と言った早稲田派の中心メンバー以外に、薄田泣菫、綱島梁川、中村春雨（吉蔵）と、金尾文淵堂とたいへん深い関わりをもつ人々の名が並ぶ。[*11] これはおそらく金尾文淵堂が編集にも部分的に関わった結果だろうと想像する。そう考えれば徳富蘆花の短文も、執筆のきっかけを金尾が作った可能性が出てくるのである。

『みみずのたはこと』まで

明治三九年に『順礼紀行』を出版し、粕谷で百姓暮らしを始めて、大正二年『みみずのたはこと』を出すまでの六年間、蘆花が公表した文章はほとんどない、[*12] 明治四二年一二月に故小笠原善平の手稿を補訂した『寄生木』[*13] を出版しただけである。ただ、四三年に起きたいわゆる大逆事件と翌年の判決と死刑執行についての蘆花の反応は興味深い。「天皇陛下に願ひ奉る」を東京朝日新聞主筆池辺三山に郵送し、一高弁論部に請われて集会で講演したその内容は「謀叛論」[*14] で、被告たちの弁護を行ったことが注目される。事件から遠からぬ時点でこれだけはっきりと自説を述べた人物は他にない。しかしこれは講演であった。

大正二年二月一〇日には、徳富蘇峰の国民新聞社が暴徒の襲撃を受ける（二度目）。急を知って駆けつけた蘆花は、兄と感激の対面を果たし、兄を慰める。そして蘇峰の懇請により「国民新聞」に小説連載を受諾し、六月から「十年」を連載し始めるのだが、準備不足の上に気が乗らずに一一回で突然中止、ふたたび蘇峰との亀裂が深まる。ついには半永久的絶交に至った。蘆花四六歳である。その詳細は日記が焼き捨てられたのでわからない。

中野好夫はこの間の事情についてさまざまな推測を重ね「いわゆる彼の『切腹』、ないしは『社会的自殺』と、そして『徳富家埋葬』ということへの志向が深まったであろうことは疑いない」としている。そして、九月二日から約九〇日間にわたる夫婦と養女鶴子と手伝いの琴子の四人連れで、いわゆる「死の蔭に」の旅へと出発していった。[*15]

この年の三月、随想集『みみずのたはこと』が新橋堂書店・服部書店・警醒社の合同で出版された。本書はよく売れ、反響も多かった。自筆広告に「折に触れ、興に乗じて筆を走らせし即興のスケッチ、短編小説、瞑想、書簡、紀行等を集む」とあり、粕谷移住後に書き留めた文をもとに、明治四五・大正元年の後半に集中して書き下ろされたことがうかがえる。

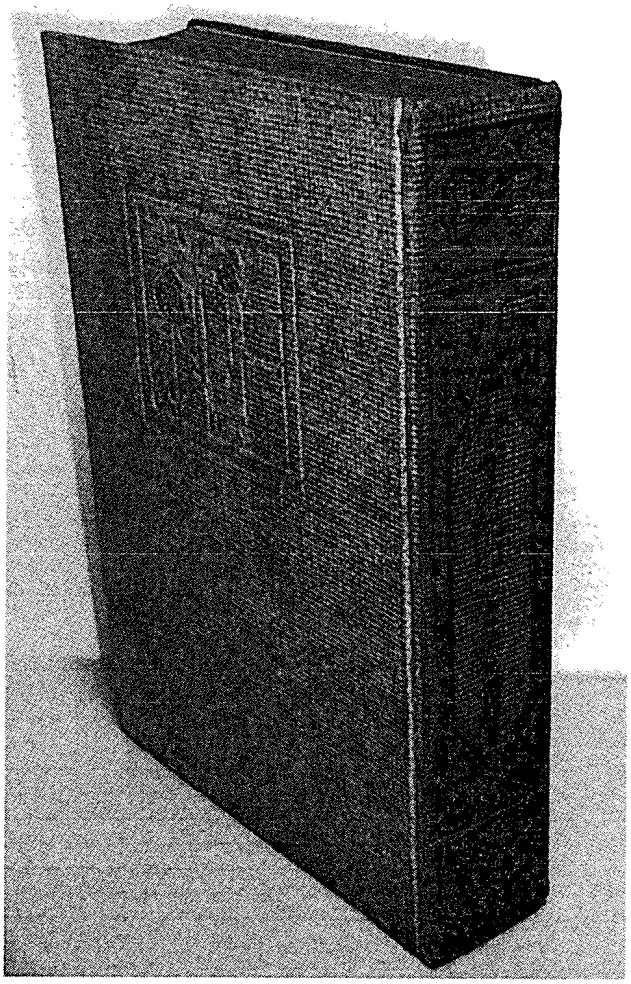
粕谷に通う金尾種次郎――『蘆花日記』より

つづく大正三年五月、愛する父一敬が九三歳で死去する。重態の知らせにも兄の家に居た父を見舞わず、葬儀にも出席せず、蘇峰の四女で養女にし可愛がっていた鶴子まで蘇峰家に帰した。蘆花は、粕谷の家の門を閉ざし「忌中面会謝絶」「喪中面会謝絶」「大正六年五月三一日迄　面会文通御ことわり」などの札を掲げて三年間閉居する。

一方、五月五日から再び日記を書き始める。これが『蘆花日記』全七巻（大正三年から七年一二月まで公刊）と

して残っている。この日記を手がかりに金尾文淵堂など出版者と著者の関係を知ることができる。

さて閉門蟄居した蘆花は、あらゆる煩悩を抱えこみながら（『日記』には食欲、性欲、嫉妬に猜疑心、自己批判などが渦巻いている）、懺悔的な長編小説『黒い眼と茶色の眼』の執筆に専念し、大正三年一二月にこれを出版した。出版者は新橋堂である。自筆広告文（読売・東京日日新聞）には「世界的に偉大なる大正三年は著者の身上にも古きもの死して新しき生命の自由を得たる大なる年なり。著者は此大なる年を餞る可く『過去』の煤掃を始めたり。煤掃の箒の先に先づかかりたるが此小説なり。著者が青春の懺悔の一片とも見るべし。敢て江湖の一読を待つ」とある。内容は同志社に学んだ若き日の、山本覚馬の娘久栄との恋の顛末を綴ったもの。大正三年は第一次世界大戦



徳富健次郎『みみずのたはこと』新橋堂書店・服部書店・警醒社刊、大正二年

が勃発、たしかに大いなる年で粕谷の蘆花にとっても兄との決別、父の死、蟄居とあらしが吹き荒れた。

金尾文淵堂の名が『蘆花日記』に初めて登場するのは、大正三年六月二六日である。順を追って、金尾文淵堂のことが記されている主要な箇所を見てみよう。

大正三年六月二六日　金尾文淵が来た。不面会。餅菓子やら鶴子へ画紙やら、よさの夫妻の「巴里より」南翠の「日蓮上人」かたおもひ二冊置いて往つた。

大正三年一〇月六日　夕方、金尾文淵堂が来た。真珠抄（北原白秋の詩歌集）、栄華物語訳、其他文淵堂新版数種、風月の菓子、鶴子へのおもちやなど持て来た。夕めしを食ふて少し話して帰つた。文淵は十五で父を亡くし、九で母をうしなひ、十七で最初の出版をし、而して東京に来て最早十年になるさうだ。妹は青木と別れて子供とウーマンの許に居る云々。文淵、疎髯をたてて老けて見えた。

この他にも大正四年まで断片的に金尾の名が登場するが、金尾文淵堂は粕谷を訪問しても面会出来たり断られたりしている。蘆花の気分しだいのようにみえるが、父が死んだ大正三年の五月・六月中の来客は一切面会謝絶であった。それ以降の「日記」を含めて、「不面会」は誰でも一様に起きている。親戚でも、北原白秋ら文学者でも、新潮社など出版者でも同じである。蘆花の文章は、生きる実感に基づき具体的な細部描写にすぐれ、かつ細部に真実のきらめきを見ようとするもので、読者を魅了した。感激した読者が頻繁に粕谷を訪れた。また面白そうな人物とは

蘆花夫妻が明治四〇年に移住した、千歳村粕谷の農家（現在、芦花公園恒春園）

差別なく会うのが蘆花の原則的な態度であったので、その反動として来客の煩わしさも尋常ではなかった。父の喪中を理由に張り紙をして不面会も差別なく実行したのである。

引用にあるように面会できたときは、食事をごちそうになってしばらく話をする。景気の悪さや他の出版者の情報やうわさ、金尾種次郎の生い立ちや家族についてや、「文淵の恋人は人に嫁し、出版事業も其人のすすめださうだ」（大正四年五月十四日）と彼が独身で居ることの理由も知り、後の日記では妹なつの勝気な性格まで評されている。このように『日記』を読むと、金尾に限らず、蘆花はどんな人間でも、女中でも村人でも牧師でも議員でも付き合うと決めたら全人的関わりを実行する。世間的な意味で相手を尊重するというのとはちょっと違って、自分はあくまで「文豪」という立場を崩さず、全人的関係とは相手に隷属を求めることでもあるのだが、ともかく職業や肩書きや有名無名など世間的な基準で差別した

りは一切していない。怒鳴ったり怒ったりしながらも真実の言葉、心を打つ言葉で接し、約束は果たそうとする。自分のやりすぎや激情の爆発に対してしょっちゅう自己批判もする。

金尾文淵堂は饅頭などの手土産とともに自社の刊行物を持参したことが記されるので、その時々にどんな本をつくっていたか、また蘆花が気に入りそうな本を選んでいることがわかる。与謝野晶子が夫の後を追って旅したヨーロッパ紀行『巴里より』、北原白秋の『白金之独楽』を手にして「羨ましい美本だ。余も傑作が出来たら、思ふ存分の美本にして…」(大正三年一二月一六日)と記している。[*16]

大正三年一二月一一日　金尾文淵が来た。最早来る頃と思ふて居た。不景気で大分弱つて居る。「生さぬ中」「新訳源氏」以外のものは地方から続々戻つて来るさうだ。そこで、将来余が書くと云ふ吹聴をさしてくれ、実は去三日、夢中に屈託していると余が参千何百円位の払ひは余が原稿をくれてやるからと云つたと夢み、翌四日、粕谷に来て見ると留守、伊香保へと直覚したわけで、新橋堂のものになつたので失望した云々。余曰く、君何歳か。文曰く、三十六。余曰く、君が五十になる時は、余が六十一歳、それ迄には若し双方が死なずまた君が余の心に背かぬかぎりは書いてやる。余又曰く、君は人気作家の余が今目前、君の経済的加勢をすることが好き乎、はた将来余が人格芸術共に精進して、日本の産物ともなるべき作物を獲るが好き乎。文曰く、諾、奮闘して其時の到るを待ちます。余も生涯に一度は骨を折つた作物を彼に与へやうと思ふ。

この日記はひとつのポイントである。金尾文淵堂が蘆花に窮状を訴え、助けを求めたのである。それに対して、い

つかは必ず良い著作を文淵堂に渡すと約束したのである。この日のことは金尾もよく覚えていて、後年に出版された『徳富蘆花　検討と追想』に自身が書き残している。それによれば、「或る年の暮のこと」、夜分に訪ね「年末金融の梗塞から是非此処で先生の原稿を貰へる予約の一言を得たいといふことを懇々と御願いした」。黙って瞑目して聞いていた蘆花はやがて静かにこういったという。「私は貴君の玉となつて完きを望みます」なにやら禅問答のようだが、ようするに目先の救済より完全なものを作ろうということのようだ。別れ際に蘆花は「私は貴君に約束を果たすまでは屹度死なないから…。貴君には一番私の尊いものをあげるから、随分気をつけてソロリソロリとおやりなさい」といわれた。それが『日本から日本へ』だったというのである。[*17]

蘆花が認めた出版者

では、このころ蘆花の家に出入りをしていた出版社は金尾以外にどんな所があったのだろう。蘆花はベストセラー作家となったが、容易に書肆との関係を結ばなかった。『日記』大正七年五月八日条には、東京堂の店員が面会を求めてきて、「奇蹟を御話したく」というので好奇心から一寸面会した話が載る。蘆花の『死の蔭に』を読んでの自分の体験を語り、「それから本題に入り、独立出版をしたいから、紀行文でも出さしてくれ云々。余は容易に書肆との関係はつけぬ、文淵堂を諷し、要するに何と返事は出来ぬ、今日は他の本屋の入り得ぬ門を入って余にCandidateの一人として姓名を記憶さした事を以つて満足して帰れと諭して帰す」(傍点筆者)とある。文淵堂をどのように語ったのだろう。ともかくこれに限らず、岩波書店や新潮社、春陽堂、博文館など多くの大出版社の編集者や大阪毎日

新聞などが訪れているが、ほとんど依頼に応えていない。中央公論社の有名な編集者滝田樗陰は当時作家たちが彼の訪問を待ち望んだと言われているが、徳富蘇峰と親しかったせいもあるのか彼も謝絶されている。

大正四年一一月六日　中央公論の滝田哲太郎が近いうちに出る婦人公論とかの主幹嶋中雄作と同道面会を求めた。謝絶。名刺に用を書いてよこした。婦人公論に小説を書いてくれと云ふのだ。直ぐ謝絶。あとで名刺を見たら原稿料は四百字十円と書いてある。一字二銭五厘だ。

原稿料が高いのに蘆花もびっくりする。

先の著書一覧でもわかるように、蘆花の初期の出世作はすべて民友社から出版された。そして兄との決別後、大正の前半期に、蘆花の著書を刊行した出版社は、警醒社、新橋堂、服部書店、大江書房、福永書店そして金尾文淵堂である。これがすべてで、蘆花が認めた出版者だったわけである。

それでは金尾文淵堂以外の四社はどのような出版者だったのだろうか、簡単に見てみよう。

警醒社

警醒社は、明治一六年に湯浅治郎らが出資して設立したプロテスタント系の出版社で、内村鑑三の著書やカーライル、ホーソン、ベルグソンなどの翻訳書などを一九四〇年代初まで多数刊行したキリスト教出版の草分けである。[*18] 牧師で政治家の横井時雄の本も出版された。湯浅治郎は上州の豪家の長男で蘆花の姉初子の配偶者、蘆花が師事し

た新島襄と同郷で同志社との関わりも深く、民友社の設立を援助した人物でもある。横井時雄も、その父は幕末の思想家横井小楠で蘆花の母の妹が後妻として嫁しているので姻戚関係にある。警醒社は蘆花が民友社から独立して歩み始めようとしたとき、最初に身近にあった出版者だった。

蘆花が『順礼紀行』などの本を出したとき、警醒社の店主は福永文之助であった。彼は大阪で今村謙吉の創立したキリスト教出版社、福音社の主任をつとめ、明治二一年に東京の警醒社を引き受けたという。[*19] 警醒社は『蘆花日記』にしばしば登場するが、そもそも民友社と根っこを同じくする出版者だった。蘆花が兄蘇峰と決別し独自の道を歩もうとするときに警醒社に助けられたわけだが、兄との二度目の決裂が決定的になった時点では、民友社系のすべての縁を切ろうとしたらしく、大正三年の『日記』からは警醒社に見切りをつけようとしていることがうかがわれる。

同年一二月八日、福永文之助が『黒潮』等の増刷分の印税を持って来訪したことを記すが、「最早今後新しい原稿をやる機会もなささうだから、黒潮、順礼紀行、寄生木の印税を今日以後一割にすることを宣言」「消極的加勢をする」とあり、それまでの著者印税率がもっと高かったことがわかる。『日記』の他所に大江書房の『死の蔭に』の出版契約が載っているが、そこに二割と明記されているので、おそらく警醒社の印税も同様であったと思われる。また「最早警醒社の日は過ぎて居る。さう云つてやりたかつたが、気の毒で口には云はれなかつた。然しいつまでつつて置く訳にもいくまい。最早今後の著作は所詮警醒社では出しきれぬ――フルイ耶蘇教では」とあり、これ以後警醒社からの出版はない。しかし、店主福永文之助の長男、一良は蘆花によく尽くし、編集者として見所があると思ったのであろう、『日記』でも評価されている。はっきりとした経緯は不明だが、父の警醒社に代わって一良に福

永書店という出版社を新しく興こさせ、蘆花の新作『新春』を手始めに晩年の蘆花の本を出版することになる。

新橋堂

次に、『みみずのたはこと』と『黒い眼と茶色の眼』を出した新橋堂。明治三七年ころから昭和初期まで活動したようだが詳しくはわからない。健康・育児書や文芸書など三〇余点を残している。蘆花の二冊以外でめぼしい本は、高浜虚子『柿二ツ』くらいか。岩波文庫版『みみずのたはこと』には、版を重ねるごとに書き残した序文が、巻末にまとめられている。大正九年の「一〇一版の巻首に」は、新橋堂野村鈴助と共同出版者の服部書店国太郎のことを記す。もともと服部国太郎のために四年待たせてようやく書いたこと、しかし刊行後九ヶ月目に服部が死去し、新橋堂の野村鈴助がその販売を一手に引き受けたこと、新橋堂野村鈴助は服部より古い付き合いで、明治三九年の順礼帰国後に自分が新聞雑誌に書いた切抜きを持って出版の許諾を得に来たという。「私は拒絶して使者の眼の前で其切りぬきの綴じ込みを引裂いてしもうた」しかし、野村はめげずに蘆花に仕え、服部と共同出版の形で『みみずのたはこと』を引き受けることになったとある。[*20]

その『みみずのたはこと』の版元が、第一〇一版を期に、『黒い眼と茶色の眼』と共に、新橋堂から福永書店に移った。「みみずのたはこと／黒い眼と茶色の眼――の引越について――」と題する著者の文章は、「新橋堂　鈴助野村さん。福永書店　一良福永さん。」と二人に呼びかけるような調子で始まり、百版まで売り広めた野村さんの手から今更離れるのは嬉しい事ではないが、

然し無常が原則で一切の物が動産である見地からは、書の複製権が時の都合で此れから彼に渡るのは普通の事ですし、真実と愛が生命の有機体として書と云うものを見る時は、境遇の変化は生命の成長に伴う自然の結果とも云えます。譬えば旅客が長途の汽車を下りて、大洋の汽船に乗り移るようなもので其処に何の無理もありません。過去に向かっては感謝があり、将来に向かっては希望があるばかりです。(岩波文庫一九七七年版より)

と福永書店に版権を移すことを宣言している。福永書店については後述する。実際は新橋堂が増刷を早くしないことにいらだつ様子が、既に大正四年ころから『日記』にはしばしば表れ、店主野村鈴助のことを、「馬鹿野村が今頃手紙をよこした。東京堂の九千九百冊は一部も残つてないから、目下第三回の相談中とさ。ノロにも程がある。金縁眼鏡などかけて、帝大の退学生だと思へば、馬鹿は畢竟馬鹿なのだ。」(大正四年一月一二日)と記している。また、妻愛子の入院が長引いて金が必要となり、どこからか借りなければならない。新橋堂には今までもずいぶん借りてきたが、この二著の売り上げで完済した。ここで借りれば「他の原稿を新橋堂にやらねばならなくなる」と逡巡し、「野村は馬鹿だ、芸者の子だけあって、軽薄な小人だ。それでも今迄多少の役に立つて居る。それを識認しないのは嘘だ。然し大概な所で遠ざけないのは、あまり愚な話だ。何は兎もあれ新橋堂とは絶縁だ。」(同年四月二九日)となって次第に新橋堂とのつき合いが薄くなり、大江書房や福永一良との関係が深まっていく。大正九年に版元が移った背景には、前年、一年間にわたる外遊で経費がかかり、福永が経済的・事務的なことのすべてを取り仕切ったそのお礼の意味もあったと思われる(『書翰十年』などから)。

ちなみに『日記』の中で「馬鹿〇〇」と呼ばれるのは、出版者に限らず親類も文学者も学者に対しても、大半の人に蘆花が付ける愛称のようなものと考えたほうが良さそうだ。

大江書房

次は大江書房保吉について、『日記』をのぞいてみよう。

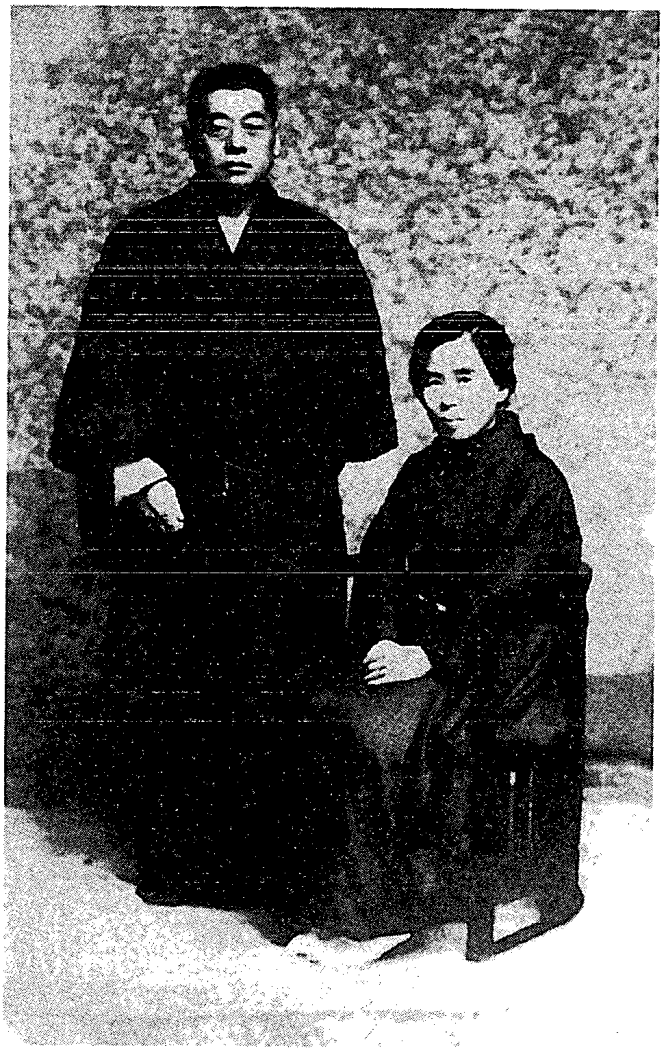
大正四年五月一四日　大江保吉が来た。今度の著作を大江に出すこと、一七日迄に千円持参の事、前払いは印税を半分して返す事、他に秘密にする事等を契約する。大江は明治三九年の夏、露西亜から帰ると直ぐ逗子に手紙をよこしたのが名を識つた最初で、其時は民友社員であつたが、若手に排斥されて独立し、数十度足を運び、ここ十年目にやつと大江の願いが叶ふたのだ。彼を蹂躙しやうなどの黒い心は失せ、今度の著作が彼の福になれと心に念じた。

まだ、何を書いて渡すかは決まっていない。結果として二年後に『死の蔭に』を上梓した。五月一七日には出版契約を取り交すが、その契約書の内容がなかなか興味深い。先に記したように印税は定価の二割、印税の前金として金千円を著者に渡し、出版時に印税から差し引くというアドバンス制をとっている。また「著者は出版者の好意を空しくせず出版者は著者を信じ原稿の出来を督促せざる事」という一項も蘆花らしくて面白い。

大江保吉は元民友社の社員で「若手に排斥された」とある。そのせいで蘆花はシンパシーを感じたのかもしれな

い。大江については中野好夫も『蘆花徳富健次郎』第三巻でコメントし、その甲斐甲斐しい働きぶりを蘆花の番頭役のようだといい、民友社員なのにどうしてなのかと疑問を投げかけているが、その理由は右の記事で明らかだ。

蘆花がマスコミを嫌った理由はいろいろと考えられるが、私は作家としてかなり怠け者だったのではないかと思っている。気が乗らなければ絶対に書かないタイプであるのは確かだが、自分自身をはたらかせるために、出版者から借金し、それを返すために新作を書くというスタイルが繰り返されていることが日記からわかる。



蘆花夫妻。大正一三年、蘆花五七歳の誕生日の記念撮影

大正四年八月一一日　野村に七〇〇円、警醒社に三〇〇円、大江に一〇〇〇円の借財がある。然し野村には追々返金ができるし、警醒社は先に印税を半減して、其時己に三〇〇円与えているのだから、急に返金の要はない。大江の一〇〇〇円は何か書いて払う分のこと。

とあり、大江の借金は次第に膨らんで大正五年三月には二五〇〇円に上った。借金するだけでなく、原稿用紙から蜜柑、各種の本を買って来させたり、いろいろな用事をこなす大江の姿が出てくる。果ては女中の周旋までさせている。現在残る大江書房の本は、大正初期に刊行された『山路愛山講演集』や村上波六、伊藤桃水などの十数冊である。

ところでこれまでのところ金尾文淵堂には借金の申し入れはない。金尾がいつも金銭的に苦しがっているのを知ってのことだろう。逆に言えば彼らよりもつき合いが古いにもかかわらず金尾に出版の機会がなかなか回ってこなかったのは、彼が貸す金を持っていなかったからともいえる。

以上、蘆花をめぐる出版者群像を瞥見したが、最後にかれらをまとめて批評し、切って捨てた一文がある。

大正四年一一月一六日　野村は馬鹿だ。福永も馬鹿だ。然し野村の馬鹿は何処か筒抜けて居る。ズルイかも知れぬ、何をして居るか知れぬが、あれでもヌケル点がある。福永はウソはつかぬが、慾心はある。印税復旧のしぶり加減で分かる。もう福永の代〔文之助のことと思われる〕は過ぎた。大江には大分強く出て居る。大江も馬鹿だ。然し俺は彼の執心に愛でて一度彼の花を咲かせたい、と思ふ。

金尾も馬鹿だ。彼は金の事については不可信。生涯に一作をやる約がある。果たさうと思ふ。然しそれは此方に金の入用がないときの事だ。

面会謝絶されても、馬鹿だと言われても蘆花の原稿を求めて、仕えるように接した編集者たちがいた。蘆花の次作が自分の会社から出ると吹聴する出版者の様子が『日記』によく出るが、それほど蘆花の本は信用や名誉と結びつくものだったのだろう。彼らは大出版者ではなかった。蘆花にとって一冊一冊の出版は人生の道標であり、出版者は共に歩き苦しみ、喜びを分かつ者だった。かといって勝手に家に押しかけるような男は撃退される。嫉妬深い蘆花にとって妻と若い女中たち（頻繁に交代）だけが家の内であり、出版者は彗星のように外から近づいては離れる関係、距離を保ちながらの道行きだった。金尾文淵堂が原稿を手にするまでにはまだ数年の時が必要だった。

『日本から日本へ』の出版

再会

話を戻す。さて、大正五年の一年間、蘆花は文章をどこにも発表しない。旅行の記録『死の蔭に』の原稿を苦吟しながら書き継いでいる。この年金尾文淵堂も粕谷に現れた形跡がない。金尾を近づけないようにしていたに違いないが、その理由がわからない。大正六年三月にようやく『死の蔭に』を大江書房から刊行する。これは四年前、父の死去後、「親不孝者」の閉居中に夫婦と養女鶴子と手伝いの琴子の四人で行った大旅行の記録である。本は売れ

ていると大江は喜んでいるが、読書評などがほとんど出ず、蘆花は「大江も今度限りだ。『死の蔭に』も一万五千が止りか、二万は決して出まい。これから段々売れなくならう、と余云ふ。m〔マダムの略号で愛子夫人〕曰く、あなたの読者は二万はありません、大部分は見栄から流行からで、本当の読者は中々其様にはありません。これから追々さびしくなるのだ。」（大正六年四月一一日）と書いている。

金尾種次郎が粕谷にやって来るのはこの年の一一月である。『日記』がこの頃の文淵堂の状況を伝えている。

大正六年一一月七日　十一時頃、金尾文淵堂が来た。十分を限り面会。はなれで面会。大正三年の秋、伊香保へ追ふて来て面会謝絶して以来だ。随分苦しいらしく、着物なども粗末にして居る。お夏を遠からず大阪の人に嫁すさうだ。子供は矢張引受けねばならぬのだ。気の毒にも思ふ。スタールの山陽行脚を一冊持つて来た。〝死の蔭に〟を未だ読まぬと言ふ。其人の作物を出版しやうとも謂ふ者が、他の出版になるとも読まぬといふ法はない、書いてもらう秘訣は、其人の作にしつかりInterestをもつにある、と教へる。読んで感想を書き送れ、と命ずる。それから何年面会謝絶しても、門前払いしても、約束は忘れぬ、生涯に一度は美しいものを書き、文淵堂から空前の美本として出版させる、と確言する。文淵堂は通俗な銭儲けより、道楽的な出版をしろ、好い意味に於いてのヤマ気が文淵堂の生命だと云ふ。

大正三年の秋以来というのは何かの間違い。約一年ぶりの再会である。「随分苦しいらしく」とあるが、たしかに大正六・七年の二年間で、文淵堂の出版物はわずかに五点である。その前の大正四・五年は合計一九点と多かったが、

この年は売れ行き好調の本がない上に、福田眉仙の画集『支那大観』二冊などの豪華本を作って経費がかさんだ結果、本を出しにくくなっていたのだと思われる。金尾の場合そういうサイクルが繰り返されている。蘆花への手土産としたF・スタールの『山陽行脚』は、大阪朝日新聞に連載したアメリカの人類学者のニッポン旅行記の単行本第一巻である。中沢弘光のカラー木版のきれいな別刷（多数）と水島爾保布（におう）のユーモラスなモノクロ挿絵が入ったしゃれた本である。経営が苦しくても、気に入った本作りには手抜きをしないところが金尾文淵堂の真骨頂である。

蘆花の『死の蔭に』を金尾はまだ読んでいなかった。原稿を取るためには他社で出た本でも読んでから著者に会うというのは編集者の基本である。金尾種次郎はもちろんわかっていないはずはない。蘆花はこの本の反響が少ないので不満なのだ。金尾は急いで読んで感想を一週間後に送ったが、蘆花は「金尾文淵『死の蔭』について手紙。沢山書いて一向つまらぬ。」と日記に記している。そして、編集者は必ずしもよく読めて、批評が出来なくてもよい、「正直に従順に著者の命令を聴く者でさへあればよい」と諦められている。この言葉には蘆花の編集者観が表われていよう。『死の蔭に』は読んで面白い本ではないし、批評しにくい。対して『みみずのたはごと』は今読んでも惹きつけられる。

そして金尾に向かって「何年面会謝絶しても、門前払いしても、約束は忘れぬ」と泣かせる言葉をはき、「道楽的な出版」をしろと励ましている。このあたりも重要な箇所だろうと思う。同業他社はそれぞれの性格をもつが、金尾には通俗的な金儲けではなく美本づくりに賭けてほしいという願いが蘆花にあるのだ。そういう出版者として存在意義を認めているのである。半年後の日記には次のように出てくる。福永書店からちょうど『新春』が出版されたところである。

大正七年四月二一日　日のくれぐれに其文淵堂が来た。しめたはなれを開かせ、対面。金尾は『新春』に夢中になつて居る。あれが面白くないものは駄目と云ふ。それから『死の蔭に』の縮刷を大江が作らぬ愚かさを云ふ。大江に勧めろ、と言ふて置く。十六円の家から十二円の家に引越し、小僧と二人生活して、然し大分元気が出て来た云々。実際元気な顔になつて居る。借金は四万円。夏〔妹のなつ〕は六つになる男の子とWomanと住み、二三十円宛かかる、と云ふ。顔は元気でも、穴のあいた足袋などはいて気の毒だ。天声は角田浩々記念図書館を計画し、福田眉仙はシナ漫遊、而して文淵は四万円の借金を済まして洋行したい云々。其内助けると云ふて置く。

○関西七分、箱根以東三分、「生さぬ仲」では壱万何千円の負債を払ふた。

今回は蘆花の新著を読んでやって来た。だいぶ元気になったという。新刊本を出さずに（出せない）、比較的売れ行き良好な本に頼っていれば借金の返済が可能だ。柳川春葉の『生さぬなか』、同『かたおもひ』や菊池幽芳の『小ゆき』の家庭小説は売れていた。これで借金の大半を返したというのである。金尾文淵堂の懲りないところというべきか、出版社としての魅力は、儲かるものだけを追いかければいいのに、そこで儲けた金をすぐに自分が本当に作りたい本に投資してまた借金をつくってしまうのである。例えば二ヵ月後の『蘆花日記』には、「美しい〝新日本見物〟持参。久しぶりに自分出版と得意兒である。定価八円。千円広告料かけて、二千売れば損はないと云ふ。」（大正七年六月二一日）ある。

この『新日本見物』という本は、副題を「台湾　樺太　朝鮮　満州　青島之巻」とするように、大正六年（一九

この後、同席していた薄田泣菫に向かっておしゃべりをする。泣菫はこのころ大阪毎日新聞の学芸部副部長で「茶話」というコラムを連載し好評を得ていた。今回の上京は蘆花に執筆を請うためだったが、すでに断られている。金尾と泣菫はお互いになにもかも知り尽くした旧友である。蘆花と三人で話す会話に遠慮はない。蘆花はこれからの外遊の旅費の不足を毎日新聞で補える、と一瞬と思うが「克己して止める」。話は金尾の妹なつのこととなり、彼女が翻訳書を出すという。[*21] そこから突然、話は転じ蘆花が金尾に縁談を持ちかける。「もう女房を持て、それから疎髯をとれ、と余曰ふ。両国橋のあの女本屋の話をする。泣菫も今度の記念出版とともに記念女房を持てとすすめる。文淵も此頃急設電話の籤に中つたり、一切の運が向いて来た、と云ふ。」とあって、この降って沸いたような話はやがて現実になり、金尾が結婚を考えるきっかけとなった。結果は蘆花が紹介した婦人を金尾はことわり、別な人から紹介された大阪出身の吉原春江と結婚することになるのだが、それは三年後、『日本から日本へ』の出版後の大正一〇年のことである。

そして、同じ一一月二三日の条に、

> 間もなく福一が来た。今日は仕事の大いに捗る日だ。（略）
> 今日は嬉しくない事と、好い知らせとある、先づ嬉しくない方から云はう。――と開口して、次の原稿を金尾文淵に与ふる事を話す。それは第二の順礼紀行である事を話す。第一の時、金尾が逗子まで、次に神戸まで、次に門司まで追つかけて来た事を話し、今度の事の偶然でない事を告げる。金尾には先刻唯其第一を云ふて、何ものを与ふるかはまだ話してない事を話す。

それから夫婦同伴エルサレムにお礼参りに行き、欧米を経て帰る、二月出発、約一年で世界を一周の話をする。福一も好い機会、と云ふ。

それについて、成る可く厄介をかけまいと思ふが、金尾は横文字も読めず、一切頼まぬから、福一が後方勤務に当たつてくれるやうに頼む。

福一快諾。

とある。福永書店福永一良は、金尾文淵堂がこれから出す本の出版に全面的に協力するというのだ。旅行の手配から海外との連絡、資金的な手当てまでやりましょうという。筆者に頼まれたとはいえ、競合する出版者がとる態度としてこれは考えてみると不思議なことだ。蘆花という人間＝著者に惚れ込んだ編集者の連帯なのだろうか。引用を続ける。

大正七年一一月二四日　文淵は昨日来嬉しくて手がつかぬさうだ。道々泣菫と小説か小品かと揣摩（しま）したさうだ。何時まで黙つて置くべき事でもないから、第二順礼行である事を告げる。明年二月、夫婦で発途の事を告げる。それは此前の心尽し、それからの忍耐、それ等のご褒美だ、と余曰ふ。金尾はわアツと声をあげて泣き伏した。心の内がいぢらしい。福一との話の事をよく話す。福一にも尋常な試練ではないのだ。

十三年ぶりに伏せ札が皆起きて来る金尾の嬉しいも無理はない。

一七）のロシア革命勃発で日本が中国東北部への軍事的圧力を高め、シベリア出兵という政治状況の中で領土が拡張していく時代の象徴的な出版といえるかもしれないが、内容は軍事色など一切なくいたって平和な異国の旅の記録である。金尾文淵堂にゆかりのある筆者や画家たちが手分けしてそれぞれの国に出かけて、紀行文を寄せ、スケッチしたものを一書にまとめた。〔台湾〕島村抱月・巌谷小波（文）、石川寅治（絵）、〔樺太〕安田稔（絵と文）、〔朝鮮〕中沢弘光・中川八郎（絵と文）、〔満州〕河東碧梧桐（文）・中川八郎（絵）、〔青島〕渋川玄耳（文）・中川八郎（絵）という組み合わせで取材に出向いている。これらの費用をすべて文淵堂が負担したとは考えられないが、カラー木版刷りや写真、単色スケッチなどが多数入り、文章も筆者の顔ぶれから想像できるように、土地の民俗や風俗をとらえた実に楽しい一冊に仕上がった。こういう類の本（『畿内見物』シリーズや『御札行脚』、『関西その日帰り』、『パノラマ地図』など）を金尾はいつもつくりたいと考えていた。しかし、制作費と手間の割には儲からない出版だった。

『新日本見物』金尾文淵堂、大正六年

さて脱線をしたが、『蘆花日記』にもどろう。大正七年は、六月二四日、九月二一日、一〇月二八日と金尾文淵堂に関する記述がある。文淵が『死の蔭に』を片手に九州を旅して来たことや、児玉花外（『社会主義詩集』の詩人。文淵堂から出版して発禁処分）が『死の蔭に』を一気に読んだと蘆花に報告したこ

とが出ている。ここで気づくのは、金尾文淵堂が蘆花を訪問する日は月末の二〇日以降が多い。あるいはそうと決めていたのかもしれない。内田魯庵の言にこの頃まで従っていたのだろうか。

新たな旅行記を金尾文淵堂に

そして大正七年の一〇月二九日、蘆花は『日記』にとうとう「今度の旅行記は文淵に出版させやう、第一の順礼行に門司まで追いかけて来た彼が第二の順礼紀行を頂戴するは自然だ」と記した。「m〔妻愛子〕曰く、外遊決定後第一に来た者が文淵ですから、それが自然です」。

文淵堂に渡す原稿は次の海外旅行の紀行文であり、長旅にはさまざまな準備が必要だから福永一良に出版のことを相談してから文淵堂に話すことにするという。「福一〔福永一良〕でなければ外遊の兵站部は勤められぬ。文淵に紀行をやると宣言して、兵站部を福一に勤めさすのは、福一が余程成長しなければ駄目だ。勿論紀行以後の著作は福一にやる機会があらう。」

と計画を練っている。そして、金尾本人に伝えて彼が喜ぶさまや、出版の記念に嫁を貰えと忠告する話、外遊の資金の算段と帰国して出版後の販売経営についての覚悟を伝える次のような日記がつづく。

大正七年一一月二三日　金尾に対し、今度の原稿は金尾に渡す事を明言する。然し当分他言無用。詳細は他日の事にする。

金尾の喜びが伝わってくる。しかし、蘆花は浮かれる金尾を制して、今度の世界一周の旅は福永書店の『新春』で得た資金で行うから金尾に負担はかけないつもりだが、旅から帰ったときからは、金尾文淵堂が「旅行記」の成功を先取りして資金を提供しなければならないと次のように言う。

其後の生活は一に其旅行の結果で支へねばならぬ。そこで金尾もよく注意する必要がある。成金が金を恵むのとの違ふ、慈善的ではない、共にするのだ。余は事務にかけてはキチャウメンだ、――小説黒潮の場合でも金尾も知って居なければならぬ。つまり喜を共にし、心配を同じうするのだ。此方が与へるものが、運よく此方も支へ、金尾も助ければよいが、反対の運命にならぬとも限らぬ。其場合、矢張悪びれぬ覚悟が必要だ。〔傍点筆者〕

最後の一文からはなにやら不吉な予感がただようが、ともかく蘆花がこの仕事に取り組む主観的な意気込みだけは強烈だった。

福永書店の協力

こうして蘆花夫妻の外遊の準備が進んでいく。福永一良は必要な公的諸手続きや船の選択や予約、必要な物資の手配などに奔走するようすが『日記』から伺われる。福永書店では『日本から日本へ』以後の蘆花の単行本、『竹崎順子』と最後の小説『富士』を出すが、このときはまだ何をもらえるかはっきりしていなかったのだから、彼の蘆

花への献身ぶりと文淵堂への協力ぶりには驚きを覚える。

夫妻の横浜出発は大正八年一月二十七日、ボルネオ丸に乗船してインド洋からポート・サイドを目指して出発した。蘆花五二歳、愛子四六歳であった。金尾種次郎（四〇歳）も横浜から長崎まで同船した。

筑摩書房刊の『蘆花日記』全七巻は大正七年一二月三一日で終わっている。その後の日記の公刊は未だない。大正八年は一年間海外旅行中であったので、『日本から日本へ』が日記代わりである。本書がどういう本であったかを述べる前に、この大名旅行の資金計画が予定通りだったかどうかを検討しよう。実は帰るまでは福永の『新春』の売り上げをつぎ込んでという宣言は早くも崩れ、エジプトのポート・サイドから大正八年六月二三日の福永一良宛の手紙で、「信用状も大分取り出した。其内金尾へ電報をかけやうと思ふて居る。処で金尾の送金は矢張金尾から送らせやうと思ふ。[*22]」とあり、『日本から日本へ』西の巻には、ローマ滞在中に資金が足りなくなったと書かれている。

七月二五日。日本から持参の五千円足らずの信用状もエルサレムを手はじめに、坡西土〔ポート・サイド〕やナポリと追々に引き出して、残り少なになつたので、朝餐後Taxi馬車で先づ中央郵便局に往き、文淵堂に三千円の電報為替要求を打電する。出版業者の中でも日本一の金もたず借金持ちの文淵堂に金を借らうとする此方も日本一の物好きかも知れぬ。

借金持ちの文淵堂から三千円を借りることになった。八月四日の条には「文淵堂から金送つたと云ふ電報」とある。金尾種次郎も予想はしていただろうが、さぞ困惑したことであろう。しかしこれだけでは済まなかった。翌年の一月

六日、ニューヨークへ渡る直前にロンドンから電報で再び三千円をニューヨーク日本総領事館宛に送るように連絡した。しかし、この金の手配には時間がかかった。蘆花夫婦がニューヨークに到着した二月四日にもまだ金は届かない。ホテル代の支払いにも不足が生じそうで蘆花はいらだっている。二月一〇日にようやく到着してほっとした様子が描かれている。こうしてサンフランシスコまで列車で行き、そこからいよいよ帰国の途に着いた。

福永宛の蘆花の手紙は、帰国後の大正一〇年三月一二日にも、金が足りなくなったから「金尾に大至急出来得る丈三菱の徳富口座に払い込むやう」に頼んだこと、その中から君が立て替えた分を差し引いて、自分が今居る興津へ送金してくれとの内容を伝える。金尾からの金は一千円と思うが、払い込み金額は不明とあるように、実際には本が出来る前に金尾文淵堂は相当の資金をこの企画につぎ込んでいることがわかる。この金をどこから捻出したかは不明である。

一方、福永一良も、蘆花の帰国後に『日本から日本へ』が刊行されるまでの期間（約九ヵ月）、蘆花のためにあれこれと尽くしていることが『書翰』からわかる。伊豆長岡に滞在する蘆花から「一良君」と呼びかけのあと「クリイム、エエフアス、それからかき餅いづれも順着。（中略）三月一日に来る時に、あの洋服代や諸買物を差引き、余分の Cash があつたら持つて来てもらひたい。買物は青木堂の葡萄酒エステフ二瓶（中略）それから面倒だがマダムの over を新調よろしく」と言われているように、蘆花のあらゆる要望に応えている。文淵堂も大正九年の刊行点数を六点と押さえ、『日本から日本へ』の発刊に賭けていたのだろうが、金尾宛の『書翰』はごくわずかしか残らぬために詳細は不明である。

『日本から日本へ』の完成と結末

そしていよいよ大正一〇年三月八日に、徳富健次郎・愛共著で、東の巻および西の巻の二部仕立て、通巻一四五四ページの本が完成する。A5判の天地左右を少し切った縦長の判型で、本文横組み、角背・紫の羽二重クロース装・箔押し、天金で小口と地は機械断裁ではなくアンカット風、箱入り、定価は各巻五円という豪華本だった。本文は六号活字で普通より小さく、行間は全角どり、余白がたっぷりとってあるので文字は小さいが、決して読みにくくはない。膨大な原稿量を収めるために金尾が考えた苦心の体裁である。随所に写真版、カラー木版も挿入される。

蘆花は、見本が届くのを心待ちにしていた。「金尾君は、休養で大阪に往ったさうで、店員が持つて来た。あまり待ちくたびれたので、本を手にしてなんだか妙な気がする」[*23]という。しかし、この手の込んだ造本を実際に数千部製作するためには時間がかかった。発行日を過ぎても大量数がなかなかまとまらない様子を心配して「金尾君からまだ『日本から日本へ』を君によこさぬ容子。何でも製本が余程手おくれらしい。大将もやきもきして居やう。此方も心配して居る。一さん〔福永一良〕面倒だが他ながら一臂を仮して気がついた事があつたら遠慮なく言つてやつてくれ玉へ。実際金尾君には少し荷が勝ち過ぎたかと思ふ。どうか力を添へてしつかりやらせたいものだ」と、吾が子を心配する親のようだ。福永への信頼ぶりがうかがえる。

出来上がった本の奥付裏を見ると、大正十年三月九日　第二版、大正十年三月十日　第三版、大正十年三月十一日　第四版・・・となっていて、一日ごとに版を重ねたように表されている。これは多数売れていることを示すトリックだが、実際に製本に時間がかかり、発行日に全部が出来たわけではなかった。蘆花は「文淵堂の近信によれ

徳富健次郎・愛『日本から日本へ』全２部、金尾文淵堂、大正10年

ば、東の巻が地方七千余、東京三千八百、西の巻は地方五百、東京は君の方の六冊と主な売捌き店の見本が一冊宛に過ぎないさうだ。読売には二万五千ももう出たやうに書いて居るが、実情如斯だ。文淵堂にも向後の吹聴について注意して置いた。急ぐ事はないが、今少し製本力があつてもよいと思ふ。」と記している。[*24]

また、『書翰十年』の末尾に、「三月九日（大正十年）金尾文淵堂宛　（註）複写版より採録」という手紙が載る。内容は、金尾文淵堂の広告の仕方などについて蘆花が怒って、批判を列挙してる。この文書自体「複写版より」とあってやや不自然で解せないところもあるが、その中で、発行日に広告しなかったこと、三月九日の広告で一面の「山形公に質す」という意見広告の下に掲載されたことなどを指摘されている。しかし、読売の当時の新聞を調べると、発売前日の三月三日に予告広告

を一面最上段段抜きで出している。三月八日はないが、九日の広告が山形公開書の下になったのは読売の側の判断のように思われる。また段抜きでないことを怒るが、左側に二行別の広告が入るだけで『日本から日本へ』の宣伝はよく目だつ。怒られるほどのことではない。蘆花の本書への期待感があふれてナーバスになったことの表れであろう。

しかし、三月一八日の福永宛書翰では『日本から日本へ』が完成し、金尾と福永一良が会って四時間も会食をしたことを聴いて、次のように蘆花が喜んでいる。

「『新春』の若い版元が『日本から日本へ』の版元を訪ふて、二階の八畳で鰻を食ふての四時間の快談は、聞くから気も伸び伸びする長閑な光景だ。

日本から日本橋へと春永や
客は福永話して
めでたしめでたし。」

とある。完成した『日本から日本へ』を肴に、金尾文淵堂と福永書店は四時間、何を語り合ったのだろうか。二人は蘆花をめぐる戦友だった。金尾種次郎も二〇年に及ぶ蘆花との長い付き合いの間にはいろいろな苦労があったが、福永一良が果たした役割と苦労も並大抵のことではなかった。お互いにねぎらいあいながら、昔話をしたかもしれない。両者は共に大阪の出身である。明治の半ばまで大阪に店を開いていたことも、その後の出版活動もお互いに

奉迎　皇太子殿下之御東歸

東の巻　第二十六版

日本から日本へ

西の巻　第二十版

徳富健次郎と愛

秋高く、大御日子日本に御日玉ふ、お御日にやけ、よろづ雄雄しく大きくなり玉ひて。愛す可き我等の親王裕仁殿下を有つ日本は幸福である。五十餘年前の日本は、青年の朋治天皇を奉じて第一維新の活躍をなした。斯可愛の君を戴して世界的維新の大舞臺に存分踊るは、何と云ふ嬉しい事であらう！

陛下の御乳歯は「日本から日本へ」の切出であつた。遠晴く哭が叫ふていよいよ御新出の時「日本から日本へ」は第一に御鑑として陛下に献ぜられた。然る後公にされたのである。

それから半歳立つた。

日本にとつて新なる試練の秋が来た、

日本人よ、眼を開いて「日本から日本へ」を讀め！

其東の巻に於て、一千九百年前十字架に死んだ耶蘇は、一千九百年後のエルサレムに復活の姿を現じ、エアザイユの講和會議を——また来る可きワシントンの太平洋會議をも見越して、世界人類の飢く可き方向を宣して居る。紀元せよ前生の耶蘇はユダヤ人として生まれたが、復活の後は日本に生れ変り日本人である事を。

其西の巻に於て、第二のアダムとイヴは、舊白の日東族人の失敗に身を鑒して、戰後の歐洲巴と米國をめぐり、其脈をとり、其新しい生命の芽をいつくしみつつ、我日本に帰つて居る。

人類の歴史は、大正八年——一九一九年を以て正に二分せられる。

「日本から日本へ」は此感慨深新記念す可き年を不朽にする生命の書である。

其感慨は、浅くも深くも吸む人の吸むに任せ、大きくも小さくも拾ふ人の拾ふにまかせた真珠の泉、人間の珠玉が無尽作にうち込められて居る。

泉は近きにあり。一切は我にあり。日本よ、冠の数主は解自身である。冠こそ恵天の愛子である。冠は自ら新にする者によつて世界を新にせねばならぬ。

日本人よ、足を爪立て、頭をのばして、何時まで空しく天の一方を望むのか！

日本人よ、眼を開いて更に「日本から日本へ」を讀め！

東の巻　第二十六版　英語教學　切手・葉書・封筒・各種印刷

東西の巻　定價　金壹圓　（郵稅八錢）（郵稅十錢）

發兌元　東京市日本橋區大傳馬町二番地　金尾文淵堂

振替口座　東京壹萬壹千壹百壹拾壹番

正味　個人　特別　一割五分　特別　一割二分

各地　東京　特別　一割五分　特別　一割二分

送料　一冊　金廿七錢

宛先　東京市麻布區笄町一番地　金尾文淵堂

東京市麻布區笄町一番地　雜誌　詩歌　社會　雜誌　詩歌

資本金　一千萬圓　積立金　一千萬圓

支店　出張所

奉祝東宮殿下一路平安御歸朝

『日本から日本へ』の新聞広告。大正一〇年九月三日「読売新聞」一面

よく知っていたはずである。出版物は地味で商売はいつもきびしいが、なによりも著者を尊敬し、第一に考える点で共通していた。

金尾文淵堂について語られる、たとえば「神戸から蘆花と同じ船に乗り込み、門司まで同船して出版許可を強請したほどの変わり者」（中野好夫）というイメージが定着しているが、決して手段を選ばぬ出版人ではなかった。徳富蘆花は、文壇人としても、家族親族の中にあっても孤独だった。彼の「仕事」にとって、断られてもまた必ず近づいてくる出版者＝編集者は、もっとも身近な他者として重要な存在だったろう。金尾種次郎が一方的に蘆花を追いまわしていたわけではなかった。蘆花もまたその存在を必要としていた面にも注目しなければならないと思う。

そして、それは金尾文淵堂だけではなかった。子供がないことを苦にしていた蘆花は、子供を生むように本をつくり、それを担う出版者も第一子、第二子というように選んでいった。『書翰十年』の中に蘆花が金尾種次郎に娶わせよ

うと紹介した、中野八千代宛の長い手紙が収められている。[*25] 金尾が別の婦人と結婚することになったので、彼女にその経緯と金尾という人物について説明しながら、縁談が成功しなかったことを詫びているのだが、その末尾近くにこう書く。

金尾君は可愛い男、珍しい男だが、八千代さん向きではなかつた。八千代さんはもつと自然的新人に之くべきであつた。金尾君の選択が旧式の婦人に落ちたのは、金尾君が自らを知つたわけで、金尾君の為にも、八千代さんの為にも仕合はせであつたかも知れぬ。金尾君の為には残念だが、八千代さんの為にはそれが好かつたであらう。

然し金尾君が誰と結婚しやうと、「日本から日本へ」の出版者として、金尾君はやはり我我の子供の一人だ。八千代さんもどうぞ金尾君夫婦の祝福を念じてください。

「金尾君は我我の子供の一人だ」と。

金尾文淵堂にとって待望の『日本から日本へ』は経済的には失敗に終わる。中野好夫『蘆花徳富健次郎』は、「売れることはやはり売れた。」「一年後には両巻合わせて三万三千部に達していたと、みずから満一年後の広告文」に記したというが、おそらくそれは過剰な広告的表現であろう。実際どのくらい売れたのか、田熊渭津子は、奥付の最終版数が東の巻三九版、西の巻三五版で、「初版二万部だったが返品の山となりぞっき本として古本市場にはんらんした」という大谷晃一の言葉を紹介する。[*26] 一年後の読売新聞に大特価三円五〇銭という広告が出ているので、[*27] 大量

の在庫を抱えたことは間違いない。なにがまずかったのだろうか、文字の横組みはなじみが悪く、共著よりは健次郎単著の方が好かった、定価各五円は高すぎたなどいろいろと考えられる。しかし造本は決して悪くないと思う。外遊資金の拠出・製造費・宣伝費と先行投資がかなり大きく、確実に費用を回収するために高定価をつけざるを得なかったことが最大の敗因ではないか。これはたんなる推測だが、初版部数は二万部より少なかったのではないかと思う。金尾種次郎は『日本から日本へ』刊行後の五月一一日ころ、めずらしく病気で寝込んだという（『書翰十年』の福永一良宛）。蘆花は、福永に「男所帯だし、如何様な容子か、心配して居る。一さんご苦労だが、一寸見舞つてくれないか」と気遣っている。

結び

『日本から日本へ』は徳富健次郎の著作の中でもあまり重きを置かれない。中野好夫が指摘するように、この本は「外遊記ではない。地名こそ外国名であるが、いたるところそれは粕谷生活のそのまま移動、そして接する人々もまた、すべて向こう三軒両隣りだった」と言えるかもしれない。独りよがりもいたるところに見える。しかし、蘆花の著作はすべて自己をめぐる人やものや出来事から発し、自己にこだわり、自分を呪い、闘い、懺悔することをとおして世界につながろうとするものだった。初期の「灰燼」から「富士」までその巡りの中にあるとすれば、『日本から日本へ』もそのひとつとして、「ホテルのボーイやウェイトレスを全員集めてクリスマスプレゼントのチップをばら撒く」ことも、エッフェル塔からの眺めの描写も、夫婦喧嘩だってそれなりに面白く読むことが出来る。

金尾文淵堂にとって『日本から日本へ』の出版が画期であったのは、二〇年間待って漸く手にした蘆花の著書だったことと、苦しい経営事情の中で起死回生の企画のはずがハズレてしまったこと、そしてその後の出版に影響を与えたことである。蘆花が旅行の前に『日記』の中で案じた「反対の運命」（前出）になってしまった。もちろん金尾は「悪びれない」。蘆花もまた然り。しかし、金尾文淵堂の出版物からもう文芸関係の本ははっきりと姿を消し（与謝野晶子の『新新訳源氏物語』は例外として）、旅行関係と仏教書が多くなっていく。中には面白い本もあるが出版点数は減少の一途をたどり、昭和期に入ると金尾の言う「自分出版」は少なくなり、精彩を欠いていくことが明らかだ。

出版社には見果てぬ夢がある。金尾文淵堂にとって二〇年間追い続けた徳富蘆花の原稿は夢のひとつだった。それがベストセラーになるかどうかは時の運である。蘆花の仕事のピークはすでに過ぎていた。出版社はそれを知りつつ、盛り返す可能性に賭けて著者にアプローチする。蘆花はだまされない人だった、いい加減にはつき合えなかった。すでに書いてきたが、蘆花は自分が書き続けるために梃子としての出版者を必要とした。その注文は多く要求はすさまじく、人間性を奪うような言葉が投げつけられることもしばしばだったから、どんな出版者でも近づけるわけではなかった。相性がいいかどうかというレベルの問題でもない。とてもベストセラーを欲しがってお世辞を言い、高い原稿料で釣れるわけでもなかった。

その一方で膨大な細やかなやりとりが交わされる『日記』や『書簡』は、蘆花の意外な一面を伝えている。家族間の日常や村人との会話、社会や文学についての短く鋭い批評に混じりあって、出版者の存在が大きな位置を占めていることである。彼らは蘆花の何に惹かれたのか、どうしてつき合えたのか。金尾種次郎も福永一良も、もはや

大ベストセラーを蘆花に求めたわけではなかった。著作に表れる精神の深いかがやきと彼の複雑な人間性に惹かれたのである。著者と出版社、お互いに求めるものの強さと方向が一致する一点があるかどうか、どうやらそれに尽きるのかもしれない。蘆花は愛を求める人だったからである。

冒頭に掲げた雑誌『サラリーマン』のゴシップ記事に、金尾文淵堂が「首をくくる」とまで言ったと伝える『蘆花全集』、彼はなぜあれほどまでに執念を燃やしたか、そのわけが見えてくる。蘆花と渡り合った出版者は数少なかったのである。新橋堂野村鈴助、服部書店服部国太郎、大江書房大江保吉、福永書店福永一良、金尾文淵堂金尾種次郎。安定した出版社に成長した新潮社の佐藤義亮について『日記』は何度かふれている。一度たりとも褒めてはいない。「佐藤では懲々」「あぶなく新潮社の食物にせられやうとした」「人を馬鹿に」等々、幾つか理由はあるのだが終始嫌っていた。蘆花が生きていればおそらく「全集」は作らなかっただろう。いつも苦しみながら新しい著作を生み出し、その成長を楽しんでいたからである。そしてもし、全集をつくるとすれば上記の出版者から選んで（一番ふさわしいのは福永書店だろう）、あるいは共同で出版させたはずである。

金尾種次郎はそのことを未亡人に伝えたかったのである。

注

＊1 『サラリーマン』一巻二号の「雑報」（昭和三年九月発行）。雑誌『サラリーマン』は同年八月に、長谷川國雄により創刊され、昭和二四年まで続いた。復刻版が刊行されている。

＊2 金尾文淵堂と蘆花との接点を示す最初の資料は、金尾文淵堂が大阪で出版した文芸雑誌『小天地』の明治三五年四月号に載る蘆花の「吾が初恋なる自然」である。『小天地』の編集長は薄田泣菫、文淵堂の二階に居候して編集にあたっていた。

＊3 『蘆花全集』月報第八号、薄田泣菫「畳の上に書く」に「私が初めて徳富氏に会つたのは、明治三十四五年の頃」「東京の郊外渋谷の家であった」と記す。雑誌「サンデー毎日」からの転載。昭和四年五月。

＊4 拙稿「金尾文淵堂をめぐる人々　その一」『比較文化論叢』九号、二〇〇二年三月

＊5 薄田泣菫「ある出版業者の話」『樹下石上』のち『泣菫随筆』（冨山房、一九九三年）

＊6 中野好夫『蘆花徳富健次郎』全三部（筑摩書房、一九七二年）によれば、蘆花は初版印税として四〇円もらい、定価は三〇銭で、あとは一冊につき二銭という約束だった。九年後の明治四二年三月には百版に達し、昭和二年までに五〇万部以上を売りつくしたという。

＊7 前掲注4拙稿参照

＊8 泣菫の証言や蘆花の後日談にある。金尾種次郎は蘆花が乗る汽船に門司まで同船し、今回の順礼行の出版を自分にやらせて欲しいと依頼したが、すでに警醒社に決まっていて叶わなず、蘆花にあなたには原稿よりもずっといいものをあげます、それは神への信仰、それだけです、と言われたエピソードがある。後藤宙外『明治文壇回顧録』（河出文庫、昭和三一年）にも記されるが、話の出所は薄田泣菫の「思出二つ三つ」（『サンデー毎日』、昭和二年一〇月。のちに『茶話』に収載）である。

＊9 『蘆花日記』全七巻（筑摩書房、一九八五年）

＊10 『早稲田文学』明治三九年一月の蘆花「余が犯せる殺人罪」は次のような話である。「ある夜郷里の新聞を閲し居りし余は不図息を呑みぬ」とはじまり、ある人物が湯帰りに肩を大袈裟に切られて即死した。凶行に及んだ人物は直ぐに割腹、という記事を読んで身の毛もよ立ち思わず自分の手を見たとい

う。「二十幾年前の事なり」と自分の少年時代の思い出に飛ぶ。自分より三つ年上の森田という青年と大江塾で知り合った。明日はゆっくりと遊びに来ないかと誘い、約束したにもかかわらず森田は来なかった。「不平に耐えず」ある日、衆人注視の中でその違約をなじったところ、森田は真っ青になって散々に毒づき、立ち上がりざまに罵り、掴みかかろうとしたが人に隔てられて、「覚えて居よと呪ひし吾一語も昨日の如く耳に残る。かくして二十幾年立ちぬ」そして、「大袈裟に！大袈裟に！」「不図吾に復へれば、切る真似をなし居たり。はつとして、あたりを見るに人なし。手に冷たきものあり。灯りに照らせば汗なり」と記す。

＊11 再興『早稲田文学』の第一号。明治三一年以来長く休刊していた『早稲田文学』を再興し文淵堂が発行元になる経緯については近松秋江『文壇三十年』（千倉書房、昭和六年）に詳しい。そこに編集には口出ししないとの条件が付けられたと記されるが、金尾はまったく関与しなかったのか。復刊第一号の執筆者をみると、島村抱月が主宰者として「囚はれたる文芸」を寄せ、恩師坪内逍遥、水谷不倒が書くのは早稲田側として当然だが、その他の筆者の内、この四人は金尾文淵堂と深いかかわりがある。早稲田と関係ない泣菫は金尾と平尾不孤が世に出した詩人であり、梁川も文淵堂の『病間録』で有名になり、春雨はのちに早稲田大学教授になるが大阪でまだ無名の若者だった頃から種次郎とは知り合い、処女作『無花果』は金尾文淵堂刊である。

＊12 明治四一年以降の蘆花は、わずかに『早稲田文学』『新人』『新女界』『国民雑誌』に談話や短文を載せ、自著の増刷時の序や石川三四郎の新著などに序を執筆する程度の活動である。数少ない友人国木田独歩（六月に死去）慰問のために編まれた『二十八人集』（新潮社）に「国木田哲夫兄に与へて僕の近状を報ずる書」を寄稿（四一年）。

＊13 陸軍士官学校を出た岩手県の農村出身の青年、故小笠原善平は蘆花の知己を得て、自己の半生を綴った手稿を大量に送った。明治四二年に病もあって自殺。その手稿をもとに蘆花が補訂を加えて刊行した。

＊14 蘆花の「謀叛論」をめぐるさまざまな経緯は中野好夫『蘆花徳冨健次郎』第三部に詳しい。また、中野好夫編で、蘆花の一連の社会的発言と大正三年五月～六月の日記を収めた、岩波文庫『謀反論』が一九七六年に刊行されている。

＊15 大正八年刊の『死の蔭に』はこの時の旅の記録である。そのコースを示せば、中央線を経て木曽路から伊勢神

宮へ、大阪へ出てそこから船で別府へ、九州を一周して門司から海路大連に渡る。満州見物をしながら鉄道で奉天（瀋陽）まで行き、南下して朝鮮を経由、釜山から海路下関へ、そこから山陰を通って京都へ、和歌山、奈良をめぐって粕谷へと帰った。九〇日間の大旅行だった。

＊16 文淵堂から刊行された白秋の『印度更紗　真珠抄』、『白金之独楽』は美本として名が高い。民友社刊行の蘆花の単行本の造本・装丁はどれも味気ない。『不如帰』初版本はスミの一色刷で雑誌のような略装本である。

＊17 蘆花没後一〇年を記念して蘆花会が編集した、諸家の回想記『徳富蘆花　検討と追想』（岩波書店、昭和一一年）に収載の、金尾種次郎筆「祝ひ豆」による。

＊18 手塚竜麿「警醒社の創業と主としてキリスト教関係文学書について」『日本プロテスタント史の諸問題』（雄山閣、一九八三年）。太田愛人『上州安中有田屋――湯浅治郎とその時代』（小沢書店、一九九八年）。前著によるとキリスト教書類の出版は二千点に及び、福永文之助が継承して二〇年目の明治四二年に「回顧二十年」を編纂、その寄稿者には、松村介石、植村正久、内村鑑三、徳富蘆花、海老名弾正、浮田和民など牧師、学者、教育家他、教派にこだわらない多彩な人々の関わりが見てとれる。

＊19 前掲注18および、大谷晃一『ある出版人の肖像』（創元社、一九八八年）による。福永文之助は今村謙吉が神戸で開業した福音社書店の主任をつとめ、明治一五年ころに大阪に本拠を移した。今村は東京から福音社の本の注文が増えるので、明治二一年四月、東京に福音社支店を開き、福永文之助に当たらせた。その頃東京で小崎弘道や植村正久が創刊した『六合（りくごう）雑誌』（明治一三年、YMCA創刊）の発行元、警醒社の経営が行き詰っていたので福永文之助は今村の援助でこれを譲り受け、警醒社の経営を始めた。

＊20 『みみずのたはこと』の版元に警醒社も加わっている理由は述べられていないが、旧知のベテラン出版者を入れておいたほうがよいとの判断だろうと思われる。

＊21 「結城礼一郎という元民友社社員で玄文社「新家庭」編集長の世話」と『蘆花日記』にはある。金尾種次郎のご息女静子さんの教示によれば、種次郎の妹なつは津田塾を卒業し、歌を良くし、与謝野晶子の東京新詩社にも出入りしていた。

＊22 『書翰十年』（岩波書店、昭和一〇年）大正八年六月二三日、福永一良宛。岩波書店、昭和一〇年。全体を通し

て差し出された先は圧倒的に出版者福永一良が多い。

＊23 『書翰十年』大正一〇年二月二八日　福永一良宛
＊24 『書翰十年』大正一〇年三月二七日　福永一良宛
＊25 『書翰十年』大正一〇年五月三日　中野八千代宛
＊26 田熊渭津子「金尾種次郎年譜考」『混沌』（混沌会、一九九〇年）
＊27 読売新聞　大正十一年五月一四日、金尾文淵堂の広告

＊参考文献

『徳富蘆花集』全二〇巻　日本図書センター、一九九九年
『みみずのたはこと』新橋堂・服部書店・警醒社、大正二年
『日本から日本へ』東の巻・西の巻　金尾文淵堂、大正一〇年
『蘆花全集』月報「落穂」蘆花全集刊行会編、昭和三年一〇月～昭和五年五月
蘆花会編『徳冨蘆花　検討と追想』岩波書店、昭和一一年一〇月
『新日本見物』金尾文淵堂、大正七年
前田河廣一郎『蘆花伝』岩波書店、昭和一三年
平林一・山田博光編『民友社文学の研究』三一書房、一九八五年
日本プロテスタント史研究会編『日本プロテスタント史の諸問題』雄山閣、昭和五八年
後藤宙外『明治文壇回顧録』河出文庫、昭和二九年
藤田福夫「文学雑誌『小天地』総目録と金尾文淵堂」『金沢大学教育学部紀要』第一五号、昭和四一年
斉藤弔花「秋宵坐談」『書物展望』第一一四号、昭和一五年一二月
高橋輝次「金尾文淵堂その人と仕事」上・下『舳板』七、八号（一九九九年）

※本稿は平成一五年度札幌大学研究助成による研究成果の一部である。